平成17年度「公開講座・公開授業アンケート調査」：実施報告

生涯学習教育研究センター助教授　木　暮　照　正

1　はじめに

昨年度・一昨年度に引き続き（木暮，2004；木暮，2005），本年度も公開講座の受講者及び公開授業の担当講師・受講生を対象としたアンケート調査を実施した。この取り組みは数年来継続しているもので（筒井・木暮，2002；木暮・筒井，2003），本学の生涯学習支援活動の在り方を検討する際の参考資料とするために実施しているものである。

本稿では，今回のアンケート結果の概要を報告するとともに，昨年度・一昨年度との比較から特徴的と思われる点を抽出し，若干の考察を加えることとする。調査1は公開講座受講者を対象としたアンケート結果であり，調査2と3では公開授業の受講者及び授業担当者を対象としたアンケート結果である。なお，質問票は原則として昨年度と同じ質問項目を用いたが，公開授業の制度的な変更等に伴い，若干の修正箇所があった。

2　調査1：公開講座受講者向けアンケート調査

目　的

調査1は，昨年度の調査（木暮，2005）等に倣い，今年度福島大学公開講座の受講者を対象に実施した。今年度は合計24講座を企画し，内22講座を実施した（「室内気候の基礎と応用」と「直ぐに役立つ染色教室」は開講中止）。アンケート調査はこのうち18講座で実施した。原町市教育委員会との共催実施の講座（「家庭教育講座」）及び本学単独主催の内3講座（「『ふくしまの歴史探訪』―中世・信達地方を開いた人々　」，「テクノプロデューサー養成講座」，「人間―その生と死」）については実施しなかった。

講座名と開設期間は下記の通りである。

- スペイン語への誘い（平成17年5月）
- 人は不確実性下では合理的な判断をするとは限らない－2002年ノーベル経済学賞，ダニエル・カーネマンの研究―（平成17年5月）
- エクセルによるマクロ実習：金融計算を題材に（平成17年5－6月）
- 話すドイツ語入門（平成17年5－7月）
- 頭と心のサイエンス：頭脳編（平成17年6月）
- 中国語への誘い（平成17年6月）
- オペレーションズ・リサーチ入門―合理的な意思決定の方法を学ぶ―（平成17年6月）
- 環境問題と法（平成17年6月）
- 無限・無限・無限―「無限」から観た数学講座―（平成17年6月）
- 私の授業論（平成17年6－11月）
- 頭と心のサイエンス：心理編（平成17年6－7月）
- 基礎代謝を高める楽しい運動プログラム（平成17年7月）
- 眠りと夢の不思議をさぐる（平成17年7月）
- 生産管理の基礎と実際（平成17年8月）
- 日本近代文学と西欧（平成17年9月）
- 心理学ステップアップ2（平成17年9月）
- 子どもと大人：輝く目，見つめるまなざし（平成17年9月）
- 心理学ステップアップ3（平成17年10月）

調査方法

被調査者

今年度福島大学公開講座を受講した方のうち，アンケートに回答した180名（延べ数）を対象とした。一人で複数の講座を受講した方もいたため，データには重複がありうるが，無記名方式のアンケートであるため，実態は把握しきれない。

質問紙構成

問1は被調査者の個人属性に関する質問項目群であった。年齢（問1－1）・性別（問1－2）・市町村レベルの住所（問1－3）・職業（問1－4）・同居家族（問1－5；複数回答）・最終学歴（問1－6）をそれぞれ質問した。

問2は，受講者が過去1年間に何回の生涯学習講座に参加したかを問う質問項目であった（問2－1）。

問3は今回受講した公開講座に関する質問項目群であった。講座を知った情報源（問3－1；複数回答）・受講講座の難易度（問3－2）・講座に対する感想

（問3－3；自由記述）をそれぞれ質問した。

問4は福島大学公開講座に対する要望を問う質問項目群であった。どのような種別の講座を希望するかを「教養を重視した講座（例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座）」「資格取得を目指した講座（例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座）」「実技の習得を目指した講座（例：英会話講座やパソコン講座）」「趣味を充実させる講座（例：スポーツ講座やガーデニング講座）」「その他（被調査者側で具体的に記述）」から選択させた（問4－1；複数回答）。最後に全般的な要望について質問した（問4－2；自由記述）。

なお，具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手　続

被調査者の便宜を考慮し，各公開講座が終了する1つ前の回でアンケート用紙を受講者に手渡し，終了回に受付に提出していただいた。

結　果

以下，アンケート集計の結果概要について述べる。データ総数は180であるが，項目によって欠損値があったため，合計がデータ総数にならない箇所もある。また，定量的な側面を重視したため，自由記述回答については一部報告を割愛する。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表1－1に年齢と性別の分布を示した。性別比では，女性が3分の2であった。男女ともに40－50歳代が最も多かった。表1－2に市町村レベルの住所の回答分布を示した。本学の立地する福島市居住者が約3分の2を占めた。表1－3に受講者の職業分布を示した。男性では会社員が，女性では会社員と公務員・専業主婦がそれぞれ多かった。表1－4に同居家族構成の回答分布を示した。男女共に配偶者・子ども・親との同居が多いという傾向であった。表1－5に受講者の最終学歴の回答分布を示した。男性では大学卒が多く，女性では大学卒と短大卒がそれぞれ多かった。

表1－1　公開講座アンケート：年代と性別の分布

年齢範囲	全体	男性	女性
20歳代	15	6	9
30歳代	30	11	19
40歳代	51	19	32
50歳代	51	13	38
60歳代	27	15	12
70歳代	4	2	2
80歳代	1	0	1
計	179	66	113

表1－2　公開講座アンケート：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	120	44	76
郡山市	15	5	10
二本松市	7	3	4
いわき市	5	2	3
相馬市	5	4	1
保原町	5	3	2
川俣町	4	0	4
三春町	3	1	2
須賀川市	3	0	3
白河市	3	1	2
安達町	1	1	0
伊達町	1	1	0
河東町	1	0	1
会津若松市	1	0	1
葛尾村	1	1	0
喜多方市	1	0	1
桑折町	1	0	1
飯野町	1	0	1
本宮町	1	0	1
計	179	66	113

表1－3　公開講座アンケート：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	51	22	29
公務員	32	10	22
自営業	13	9	4
専業主婦	26	0	26
パートタイマー	10	1	9
無職	25	10	15
その他	22	14	8
計	179	66	113

表1－4　公開講座アンケート：同居家族構成
（延べ数）

	全体	男性	女性
いない	27	10	17
親	67	24	43
配偶者	101	42	59
子ども	67	29	38
その他	5	1	4

表１－５　公開講座アンケート：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	44	19	25
専門学校卒	17	2	15
短大卒	34	3	31
大学卒	80	40	40
その他	3	2	1
計	178	66	112

問２の回答から受講者の過去１年間の生涯学習参加傾向を示す。表１－６に過去１年間の生涯学習参加の回数を示した。「０回」と「１－２回」との回答が大多数を占めた。

表１－６　公開講座アンケート：過去１年間の生涯学習参加回数

参加回数	全体	男性	女性
０回	65	25	40
１～２回	69	25	44
３～４回	30	8	22
５～６回	7	2	5
７回以上	8	5	3
計	179	65	114

問３の回答から講座を知った情報源と受講講座の難易度評価の傾向についてまとめる。表１－７及び表１－８に講座を知った情報源の回答分布を示した。男女ともに新聞の折り込みチラシを通じて知ったという回答が全体の中で５割近くを占めた。「その他」の中では，過去に福島大学公開講座を受講したことがある市民に対して毎年送付している講座・セミナー案内を通じて知ったという回答が多く見られた。

表１－９に受講講座の難易度評価の回答分布を示した。男女差は見られず，「ちょうどよかった」という意見が約３分の２を占めた。

表１－７　公開講座アンケート：講座を知った情報源（延べ数）

情報源	全体	男性	女性
折込チラシ	84	23	61
新聞記事	9	5	4
テレビ	0	0	0
インターネット	24	16	8
知人・友人	24	6	18
その他	65	25	40

表１－８　公開講座アンケート：講座を知った情報源（延べ数；その他で複数回答があったもの）

情報源	全体	男性	女性
講座セミナー案内	35	13	22
個別チラシ	6	0	6
会社	5	4	1
教員からの紹介	3	1	2
福島大学内	3	2	1

表１－９　公開講座アンケート：受講講座の難易度

講座の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	1	1	0
やや易しすぎた	24	12	12
ちょうどよかった	105	35	70
やや難しかった	35	12	23
難しかった	5	3	2
計	170	63	107

問４の回答から，福島大学の公開講座に対する要望の傾向をまとめる。表１－10に福島大学に希望する生涯学習内容の回答分布を示した。教養型講座の希望が最も多く，次に実技型が多かった。

表１－10　公開講座アンケート：福島大学に希望する生涯学習内容（延べ数）

タイプ	全体	男性	女性
教養型	116	40	76
資格型	45	15	30
実技型	71	20	51
趣味型	45	13	32
その他	27	15	12

ま と め

本学の公開講座受講者層の傾向は従来とほぼ同じで，40－50歳代の女性が相対的に高い比率を占め，また比較的社会人が多かった。ただ，昨年・一昨年と比べると，男性受講者の比率は増加傾向にある（平成15年度：30.1％→平成16年度：24.8％→今回平成17年度：36.9％）。原因としては，生涯学習への理解が浸透し，時間的に忙しいとされる成人男性層の参加意欲も増大しているという可能性がまず考えられる。この妥当性については別途吟味が必要ではあるものの，今回の変化がその現れの一端であるとすれば，大変望ましい傾向であるといえる。というのも，生涯学習は主婦層・高齢者層の参加が多く，いわゆる成人男性の参加が非常に少ないことが主要な問題点と捉えられているから

である。このような受講者層の偏りは学習内容の設定にも反映し，結果として学習メニューの硬直化（例えば，趣味的な内容への偏重）を促すことにもなる。公民館等の職員が現代的課題に関する講座を企画したいと思っても，参加者が見込めないために断念せざるをえない場合もある。他の生涯学習機関での男性参加率とも照合しなければ断定はできないものの，もしも大学の公開講座の成人男性参加率が他機関の講座と比べて高いということであれば，大学が積極的に成人男性をターゲットとした講座開発を行うことはこの問題を解決する有効な手段となる。すなわち，単一の生涯学習機関が全ての生涯学習者層に遍く学習機会を提供するということではなく，各機関が得意とする学習者層を選定し分業することで，全体として「普遍的な」生涯学習の提供を行っていくことも検討に値する。

また今回の結果から，男女を問わず全体として高学歴化が進んでいる傾向も認められた（大学卒の割合＜男性＞平成15年度：43.9%→平成16年度：55.0%→平成17年度：60.6%；＜女性＞平成15年度：21.1%→平成16年度：26.6%→平成17年度：37.7%）。この傾向は，大学での通常の講義内容をそのまま市民に対して提供することが可能になりつつあることを示すものともいえよう。もちろん公開講座の受講者は大卒者のみで構成されるわけではないので，既有知識や経験の異なる集団に対して一律に教育提供しなくてはならないという困難さは常につきまとうことにはなるが，このことは今後の通常の大学講義でも配慮せざるを得ないものであり，その意味ではもはや生涯学習・市民教育に特有の問題ではない。

但し，大卒者は公開講座に対してリカレント教育的な側面を期待して参加する傾向もあるため，この点については講座企画時に合わせて検討しておく必要がある。このことに関連するかもしれないが，本学に期待する公開講座の種別は依然として「教養型」が圧倒的に多いものの，わずかではあるが「実技型」への関心のシフトも見られた（平成15年度：29.4%→平成16年度：31.9%→平成17年度：39.4%）。以上のことから，公開講座の編成に当たっては，教養的な側面を保ちつつも，受講者の実利につながるような，例えばリカレント教育に対応できるような編成に配慮する必要があると考えられる。

最後に，公開講座の受講者からは継続しての学習を求める声が多いということを指摘しておきたい。例えば，問3－3の「講座の感想」（自由回答）からは「講座の総時間を増やしてほしい」旨の回答が比較的見られた（計16件で，全体の約1割）。大学講義と比べて，一般に公開講座は短いので，その点が一種のフラストレーションとなっている可能性は考えられる。しかしながら，忙しい社会人層をターゲットとして想定する場合には，単純に継続的な講座を開発するだけではうまく対処できないであろう（例えば，部分的にしか参加できないために，初めから参加しないという意向が働く等）。ある程度の期間継続して学ぶことが可能でありながらも，時間的に忙しい社会人の参加意欲が減じないような開設方法というのは一概には想定できないが，今後はそのような点にも配慮していく必要があろう。今年度，筆者は「頭と心のサイエンス」という講座シリーズを2期間に分けて実施した（各シリーズは2時間×3回）。1シリーズ6回全てに参加するとなるとスケジュール的に困難になる可能性がある上，受講料も割高になり，結果として参加をためらってしまう可能性を防ぐために，今回は意図的にこのような2期間制で実施した。アンケートではその側面を直接には聴取していないため（また，躊躇して結果受講しなかった人がいたとしてもアンケートすることができないため），今回の設定方法の有効性は直接には検証できないものの，解決案の一つとして提起しておきたい。

3　調査2：公開授業受講者向けアンケート調査

目　的

今年度は74科目（前期科目41科目・後期科目33科目）を公開授業として開放し，延べ129名の方を受講者として受け入れた。昨年度と比べて特筆すべき特徴は，基本的に全ての授業コマを開放したことと，市街地のサテライト「街なかブランチ」で現代教養コース生向けに開講される講義（現代教養科目）を原則全て開放したことであった。このため，昨年度よりも開放科目数は倍となり，受け入れ受講者数も35名増加した。

昨年度と同様に，受講者および担当講師を対象にアンケート調査を実施したが，この項ではまず受講者向けアンケートの結果を報告する。

調査方法

被調査者

今年度の公開授業を受講した方のうち，平成15年2月上旬の段階でアンケートが回収できた64名（延べ数）

を対象とした。一人で複数の講座を受講した方もいたため，データには重複がありうるが，無記名方式のアンケートであるため，実態は把握しきれない。

質問紙構成

問1は，調査1の問1と同様に，被調査者の個人属性に関する質問項目群であった。年齢（問1－1）・性別（問1－2）・市町村レベルの住所（問1－3）・職業（問1－4）・同居家族（問1－5；複数回答）・最終学歴（問1－6）をそれぞれ質問した。

問2は，受講者が過去1年間に何回の生涯学習講座に参加したかを問う質問項目であった（問2－1）。

問3は，今回受講した公開授業に関する質問群であった。今回受講した授業名（問3－1）・公開授業を知った情報源（問3－2；複数回答）・受講した授業の難易度（問3－3）・公開授業の設定回数（問3－4：自由記述）・公開授業の感想（問3－5；自由記述）をそれぞれ質問した。

最後に，問4では全般的な要望について質問した（問4－1；自由記述）。

なお，具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手　続

公開授業の担当講師に受講者用のアンケートを事前に配布し，実施を依頼した。開放コマの終了回にアンケート用紙を受講者に配布していただき，回答後に担当講師に提出していただくという方式で行った。

結　果

以下，アンケート集計の結果概要について，表を参照しながら述べる。データ総数は129であるが，項目によって欠損値があるなどしたため，合計がデータ総数にならない箇所がある。また，定量的な側面を重視したため，自由記述回答については一部報告を割愛する。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表2－1に年齢と性別の分布を示した。男性・女性ほぼ同数であり，全体としては50歳代が最も多かった。表2－2に市町村レベルの住所の回答分布を示した。福島市居住者がほぼ4分の3を占めていた。表2－3に受講者の職業分布を示した。男性では会社員と無職，女性では専業主婦がそれぞれ多かった。表2－4に同居家族構成の回答分布を示した。男女共に配偶者・親・子どもとの同居が多いことが窺えた。表2－5に受講者の最終学歴の回答分布を示した。男性では大学卒が，女性は短大卒がそれぞれ多かった。

表2－1　公開授業アンケート：年代と性別の分布

年齢範囲	全体	男性	女性
20歳代	3	1	2
30歳代	6	2	4
40歳代	12	5	7
50歳代	23	12	11
60歳代	16	9	7
70歳代	1	1	0
80歳代	2	2	0
計	63	32	31

表2－2　公開授業アンケート：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	49	27	22
川俣町	3	2	1
須賀川市	2	0	2
二本松市	2	2	0
伊達町	1	0	1
郡山市	1	0	1
三春町	1	1	0
猪苗代町	1	0	1
白河市	1	0	1
飯野町	1	0	1
梁川町	1	0	1
計	63	32	31

表2－3　公開授業アンケート：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	13	10	3
公務員	9	6	3
自営業	5	5	0
専業主婦	14	0	14
パートタイマー	3	0	3
無職	16	10	6
その他	4	1	3
計	64	32	32

表2－4　公開授業アンケート：同居家族構成
（延べ数）

	全体	男性	女性
いない	7	6	1
親	18	8	10
配偶者	44	23	21
子ども	24	11	13
その他	5	3	2

表2－5　公開授業アンケート：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	9	1	8
専門学校卒	6	1	5
短大卒	10	0	10
大学卒	34	26	8
その他	5	4	1
計	64	32	32

問2の回答から受講者の過去1年間の生涯学習参加傾向を示す。表2－6に過去1年間の生涯学習参加の回数を示した。「1～2回」との回答が多く，「0回」「3～4回」との回答がそれに続いた。

表2－6　公開授業アンケート：過去1年間の生涯学習参加回数

参加回数	全体	男性	女性
0回	11	4	7
1～2回	27	10	17
3～4回	11	6	5
5～6回	7	6	1
7回以上	8	6	2
計	64	32	32

問3の回答から講座を知った情報源・受講講座の難易度評価および公開授業という開放方式に対する評価の傾向についてまとめる。表2－7に講座を知った情報源の回答分布を示した。男女ともに新聞の折り込みチラシを通じて知ったという回答が最も多かった。その他の回答では，本学発行の「講座・セミナー案内」で知ったという回答（14）の他，本学内で知ったという回答（4）も複数みられた。表2－8に受講講座の難易度評価の回答分布を示した。男女差は見られず，「ちょうどよかった」という意見が約7割を占めた。公開授業の回数設定（試験を除き原則公開）に関しては，「妥当である」という趣旨の回答が29名でもっとも多く，次に「少ない」という趣旨の回答（15名）で，「多い」という趣旨の回答は2名に留まった。

表2－7　公開授業アンケート：授業を知った情報源（延べ数）

情報源	全体	男性	女性
折込チラシ	31	15	16
新聞記事	2	2	0
テレビ	0	0	0
インターネット	8	6	2
知人・友人	10	5	5
その他	23	12	11

表2－8　公開授業ンケート：受講授業の難易度

講座の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	1	1	0
やや易しすぎた	5	0	5
ちょうどよかった	45	24	21
やや難しかった	12	7	5
難しかった	0	0	0
計	63	32	31

ま と め

昨年度の公開授業はほとんどが昼間開講であったことから，参加者層が全般的に高齢層に偏り，かつ社会人層が少なかった。これに対して，今年度は，夜間中心開講の現代教養科目を公開授業としたため，とくに男性会社員の参加が増加した（平成16年度：1名→平成17年度：10名）。この10名の内9名は現代教養科目の参加者であったことから，夜間開講の授業を増やしたことによる効果といえる。現代教養コースはそもそも社会人向けの課程であるので，この傾向はある意味当然の帰結といえるが，生涯学習の観点，すなわち，成人男性の生涯学習への参入促進の観点から考えても有効であったことは間違いない。また，公開授業の特徴である「より専門性の高い教養・知識を獲得したい」と願う市民への教育提供の観点から考えても，社会人向けに開講される科目（現代教養科目）を一般開放することは適切な開放方策であるといえよう。このことによって一般市民が現代教養コースに入学することよりも公開授業の受講生となることを選択してしまうのだとすると，大いに問題となるわけだが，両制度間には単位取得の有無で異なる上，実技系の科目やゼミナールについては参加が認められていない等，「大学が『学生』として認知するか否か」という点で大きな差異が存在することから，その点は差し当たり心配する必要はないのではないかと考えられる。但し，この「『学生』として認知する」ことの境界が曖昧になってくると問題に発展してくるので，この点は冷静に検討をしておきたいところでもある。

過去1年間の生涯学習参加回数は若干ではあるが増加傾向にあった（平成16年度では「0回」が圧倒的に多かった）。これも生涯学習の浸透（「生涯学習を知る段階」から「参加実行してみる段階」への変遷）の現れの一端とも考えられる。また，公開授業実施3年目ということもあり，リピーター参入の影響も考えられる。前者の可能性であれ，後者のそれであれ，生涯学習の経験者が参加してくることは避けられない傾向で

ある。正規学生の場合は毎年同じ講義を提供したとしても，対象学生自体が異なるために授業としては成立するが（むしろ同じ内容を提供しなければならない基幹的な科目もある），生涯学習者は必ずしも卒業を意図して学習しているわけではないので，毎年同じカリキュラムではいずれリピーターは離れていってしまうことになる。この意味では，カリキュラムが時代の要求に即応して柔軟に対応可能な公開講座の方が相応しい形態といえよう。本学では公開授業を始めてから日が浅いこともあり，公開講座と公開授業との役割分業についても十分吟味考察できる状況にあるとはいいがたいが，近い将来にはこのような点も検討する必要がある。

また，公開授業の回数設定（試験を除き原則開放）について，概ね「適当」であるとの回答を得たものの，それでも「少ない」との指摘も比較的多かった。従来の大学では年間を通じて科目が開講されていたため，1年間の受講を原則として捉える学習者がいたのかもしれない。しかしながら，一つ手続的な問題点として，受講内定通知が授業開始後であったことから，内定通知を受け取った後でないと参加できないと理解したために，本来であれば受講できた最初の2－3コマを受講しなかった受講生の方もおり，このことから「少なかった」と回答している可能性もある。この問題は受講手続周知に関する齟齬であり，次年度には改善をはかり，このようなことがないように検討中のところである（ただ，受講内定を授業開始前に設定することは事実上不可能であることから，「当該授業には最初から参加すること」を周知することしか対策がないというのが現状でもある）。

4　調査3：公開授業講師向けアンケート調査

目　的

調査3では福島大学公開授業の担当講師を対象とした。

調査方法

被調査者

今年度の公開授業の担当講師のうち，平成17年2月上旬の時点でアンケートに回答した40名を対象とした。

質問紙構成

問1は公開授業に関する質問項目群であった（全て自由記述）。公開授業の形態（問1－1），公開授業の設定回数（問1－2），および公開授業への感想・意見（問1－3）をそれぞれ質問した。

問2は，福島大学の生涯学習支援活動に対する要望を問う質問項目であった（問2－1；自由記述）。

なお，具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

手　続

公開授業の担当講師にアンケート用紙を事前に配布し，回答を依頼した。調査2のアンケート用紙と併せて，生涯学習教育研究センターに提出していただいた。

結　果

講師向けアンケートは全ての項目が自由記述であり，定量的な集計を行うことが難しい。このため，回答を列記することで報告に代えたい。但し，一部抜粋したり補足説明を加えたりした箇所もあるため表現が回答通りでない場合もあることを申し添えておく。また，「とくになし」といった類のコメントについては割愛をしている。

問1の回答から公開授業に対する評価についてふれる。公開授業の形態に関する回答は以下の通りであった（順不同）。

- 現実的には少数しかいないので，授業に参加してもらっても特に問題はないと思います。
- 講義科目なので両者の交流はなかったが，担当者として刺激があった。
- 聴講学生170名強の中のお一人で，社会人学生も数人いる授業ですので，特に公開授業だからという意識はなかったです。
- 大変困難に思います。
- 学生にも刺激になった。
- 受講態度は大変よいという印象を受けた。
- とても良いですが人数が多くなるようなら管理が大変になると思います。
- 試験がどうの……ということを目的にしている一般学生に比べ「話を聞きたい」という姿勢が強く，意欲を感じた。
- 講義科目であったので学生と別の対応の必要はなく，問題はなかった。講義をする側にとっては市民にも満足してもらえるようにしなければという，いい意味でのプレッシャーとなった。結果として学生にも市民にも従来よりも満足してもらえる内容となったと思う。
- 一緒にするのは市民にも学生にも指導の丁寧さを減ずることになりかねないとの印象でした。

- 夜間の授業で社会人学生も一緒なので違和感はない。
- よく質問をするのは，（公開授業の）受講生であり，学生にも刺激になっていると思う。よいと思う。
- 一般学生も刺激を受けるので良いのではないか。
- 市民受講者と一般学生お互いにとってよいと思う。
- 受講者には，受講に責任をもってほしい。（最初だけや，トビトビでは授業者もめんどう）（シラバスで内容を確認させ，初回から受講料をとる）
- 社会人の積極的な姿勢が学生に好影響を与えている。
- 現代教養コースが社会人で40代以上の方も多く，公開授業の受講生が混在しても違和感はなかった。
- 現代教養コースの場合は存在に気づかない。
- 企業人の中には「入門」授業のレベルの低さに物足りなく思っている人もいた。
- 今回は一般学生への勉学的刺激という点で大変良かった。
- どの方が市民の受講生かわからないままでした。
- 受講態度が立派なのでプラスの効果がある。
- 需要はもっとあるでしょうから広報を広げて下さい。
- 現代教養コースの授業で社会人が多かったし，概論的な内容だったので一緒に受けてもそれほど問題にならなかった。
- 別にこれということはありませんが，互いに緊張感があってよい。
- 今回特に問題はなかったが，学生とのレベルが違いすぎた場合には問題が生ずると思う。
- 互いに刺激になって効果的だと思います。
- 学生にも刺激があってよいと思う。
- とてもいい刺激になると思います（双方にとって）。
- 一般学生と別の形態にして欲しい。
- 互いに良い影響を受けることもあります（学習意欲など）。受け入れ数によって教室の大きさに問題もある。

公開授業の設定回数に関する回答は以下の通りであった。

- 授業の最初の1回目あたりに手続の関係で出席できないと聞きましたが本当ですか？　授業の最中に中間テストや休日などを入れると授業回数が減ってしまい申し訳なかったと思っています。一般学生に合わせるとどうしても授業回数が減ってしまいます。
- 昨年は数回にすぎなかったので，原則開放で充分学んでもらえる点，よいのではないでしょうか。
- 全体を理解していただくのは良い事ですが……。
- 一つのテーマでやる場合15回ぐらいでいいと思われる。
- 別に問題はありません。最初から最後までで結構です。
- 一定料金で好きなだけ出席できると良いと思います。
- 30回は多すぎた。
- 担当科目は学生に対して受講調整を行いながら市民3名を受け入れた。市民の受講は断るべきであったが，大学として宣伝している以上せっかく申し込んでくれた市民に断わるのも申し訳ないとの気持ちもあった。また，授業に対応する事務担当が2つに分かれていて公開授業受講者の受入れがどういう日程で進んでいるのか，どの時点で受入の可否を判断し通知するのかなどはっきりしないまま授業が始まってしまった。
- 以前の中途半端な実施回数が改善されてよかった。
- 回数は多いとは思わない。後期の継承科目も受講してくる可能性もある。
- よいと思います（昨年までの途中（6回）までと比べて）。
- 試験も受験可にしてもいいのではないでしょうか。
- 従来の回数よりよいと思います。
- 受講者の興味関心に応じているのでよいと思います。授業内容によっては必ずしもそうでないこともあるかもしれませんが……。
- オムニバスで単発的な内容であれば問題ないが，連続的な内容だとつまみ食い的な受講ではついていけない可能性がある。
- 限定開講よりやりやすい。4月の頃の混乱を解消する方策は必要。
- 15回ぐらいが適当かと思われる。

公開授業への感想・意見に関する回答は以下の通りであった。

- 特に公開授業ということでは何もありません。

ある方は毎回熱心に質問に来てくれましたが，授業内容が理解されていたのかは疑問です。授業レベルの設定がむずかしいかもしれません。

- 他の科目でも広げてよい。
- アンケートを返されるとき，当該科目に関する参考文献を聞かれ，また，「長い間お世話になりました」と挨拶があり，普通の学生にはない，今後の勉学意欲と社会人の礼儀正しさを実感した。
- 考慮をまったくしない授業では困難に思います。
- 新しい方が増えない（リピーターばかり）。システムのせいか，（担当教員である）私の広告文の未熟さのせいか。
- 人数が少ないので（1人）余り影響は感じられない。
- 受講者1人のみでやや退屈しました。
- 同じ授業に出る受講者への対応を2つの別の係が担当するというのは，制度上問題があり何らかの解決等が必要だと思う。
- 学生・市民双方に責任をもって教育するには，両者の混在型の授業は好ましくないと思う。市民向けの公開講座等で対応する方がよいのでは？
- メニュー増を考えるべき。
- なるべく多くの講義を公開授業にしていくべきだ。
- 公開授業の受講者の方が問題意識も高く熱心である。
- とくに公開授業を意識せずにやったが，市民受講者の評判は良かった。市民受講者の数がもっと多い方が良いと思う。
- 授業者側にも一定の緊張感が生まれ，よい効果があるように思います。
- 本年度はカリキュラムの新旧境目にあたり学生が少なく結果的に市民の比重が高くなったが，かえって良い効果をもたらした。
- 公開授業の受講者は意欲が高い。そのぶん正規学生の私語が気になるようであった。
- 係の方から2名受講者がいると連絡をいただきましたが，実際に最後まで参加してくれたのは1名でした。毎回出してもらっている感想用紙から推測するともう1人の方は結局一度も出席せず，でした。受講しなかった（取りやめた）理由がわかれば教えていただきたいです。
- （正規学生向けに実施している）FDアンケートの中に公開授業受講生の欄を設けた方がよいと思う。
- 社会人と，高卒者とのレベルの差が大きすぎて，内容設定が難しい。
- 受講制限（一般学生対象）のある場合と，制限がなくても受講生数が多い場合は公開授業でないような措置（非公開とする）が必要と思います。
- 公開授業という意識をもたないまま授業を行ったので，受講生の方に不満がでるのかもしれないとこれを書きながら心配になってきました。
- 受講生と個人的に話ができればいいと思った。
- 学生同士で話し合わせる時間を取ったが，公開参加者は「ちょっと見学に来ただけです」というようなスタンスだったので，なかなか一般学生の中には入っていけない感じだった。
- 年長者でしたので，昔の様子を伺うのに好都合でした。ただし，テーマによっては年齢差が問題になる場合があります。
- 受講学生の若い男性の態度が気にかかった。何を学びに，何を理解しに来たのか疑わしいものと感じた。授業以前の問題である。
- 市民受講生については，試験は不要にしても，授業への感想や収穫，要望など，何か残してもらうことを義務付けてもいいのではないか。
- 少人数のせいか皆さん熱心に参加されていました。
- 市民の受講者が大変熱心であったのは驚いた。
- 今回は受講者が途中で諦めたようだが，科目によってはやむをえないことと思う。
- 開講側には特に負担もなく続けやすいシステムだと思います。
- 受講料はもう少し高くし，教員の手当てとして支給する制度に変える。教員の希望で開講する。
- 授業では様々な材料等を扱うので（危険物も含む）少し補助金や学生補助員も考えてほしい。

問2の回答から福島大学の生涯学習支援活動に対する要望についてまとめる。寄せられた回答は以下の通りであった。

- 何でもかんでも公開すればいいのか？　ということを感じます。公開用の授業にするならばそれなりの対応をしないと一般学生と一緒に聞けばいいということでしょうか？　授業と講演のちがいのようなものでしょうか。
- 宣伝の工夫をなおやってよい。夏休みの特別セミナーなど。ただし担当は専任教員以外で。

- さらに積極的に推進して下さい。
- 法人化された以上，事業としての収益性についてもきちんと考えていくべきである。
- 一般社会人の興味関心に応えているのか不安。
- 夜間の授業は基本的に全て公開授業としてはどうか。
- 教員が授業を行うだけでなく，市民受講者と一般学生が意見交換できる方がお互いに刺激しあってもっとよいと思う。
- 公開授業となるものについて，学生に事前に（学科課程等で）知らされていると学生には違和感はないと思います。
- ある程度基準で授業を選んで，公開授業を定めてはと思います。
- 担当者が希望すれば演習科目の聴講を認めてもよいのではないか。
- 市民のニーズには応えたいが（ニーズがあれば短期集中講座を開いても良いが）学内の仕事が軽減されるわけでもないので。
- 現代教養科目はまだ始まったばかりで質が保障できないので一律公開にするというのはやめた方がいいと思う。
- 上記のように書いたが，大多数の社会人からは高い評価を得ているので，公開授業という形は喜ばれていると思う。
- 今後とも積極的に開放するとよい。
- あまり内容を知らないので，学内にももっと知らせて，理解を得るとよいと思う。
- 会場（チェンバ大町）をもっと魅力的にできないか。
- 公開授業については，授業の内容や進め方によって，公開になじまない授業も多くあると思うので，今後も公開の可否についてはあくまでも担当者の判断に任せてほしい。
- 広く公開して現役学生に刺激を与えることは良いことだと思います。
- 入試で選抜された学生と社会人を同じ扱いで受講させることは一般論としては問題だと思う。
- この活動で得た収益がどのように活用されているのか不明である。
- 受講者の方が払ったお金は講師に還元されないんですか。
- 今後とも出来る限り開いていきたい。

まとめ

アンケートの自由記述部分が多く定量的な評価が難しいことから，一意の結論を導くことは差し控えなければならない。昨年度のアンケートでは概ね公開授業の取り組みに対しては好意的な評価が得られていた。今年度も「市民受講者の真剣な受講態度が担当講師にも正規学生にもよい緊張感をもたらす」といった好意的な評価や「授業コマの原則開放の方が進行上都合がよい」といった制度上の改善についても一定の評価を得られた。しかしながら，今年度のアンケートにはネガティブな評価も寄せられた。代表的な意見・見解としては，「学生と市民を一緒に教授することは困難な科目もあるので，その点をキチンと吟味整理しておくべきである」「担当者へのインセンティヴは未整備」といったものが挙げられよう。

公開授業はより専門的な教養・知識を獲得したいと願う市民にとって大変有効な生涯学習のチャンネルであり，今後も発展をさせていくべきであると考えられるが，実際に講義を担当する教員，授業関係を所掌する教務課を始めとした職員の方々の理解と協力がなければ継続が困難な事業でもある。これらの点については今後改善方策を検討し，かつ，何故公開授業が生涯学習にとって有効有益であるのか，その論点整理も今後必要になってくると思われる。以上の点を善処し，よい方向にシフトさせていきたい。

5　結びに代えて

本稿では昨年・一昨年に引き続き実施した公開講座・公開授業アンケートの概要を述べた。当アンケートは経年変化を把握するための継続的取り組みである。今回の結果概要からは，一部において一昨年・昨年と異なる傾向が認められたものの（男性受講者の増加傾向，全般的な高学歴化，生涯学習経験者の増加傾向等），重大な変化まではなかったといえる。

最後に，本稿を締め括るに当たり，アンケート調査に関する今後の課題について触れておきたい。前報（木暮，2005）の最後でもこの論点，すなわち，生涯学習アンケートの結果はその後の生涯学習講座企画立案に対して有効なのかどうか，について若干触れたが，その際，筆者の見解として次のような表明をしておいた。「測定しやすいニーズ（顕在的ニーズ）と測定しにくいニーズ（潜在的ニーズ）とが存在する。測定しやすい顕在的ニーズとは，アンケート回答者が自分自

身で明確に理解しているニーズであり，すでに生涯学習に参画している人であれば，その経験に基づいてニーズ自体も形成されやすいと考えられる。一方，測定しにくい潜在的ニーズとは，回答者自身も明確には理解しておらず，具体的な尋ねられ方をしないかぎり判断できないようなレベルのニーズである。生涯学習に参画していない人であれば，なおのことニーズが顕在化することは少なく，よってアンケートで希望する生涯学習について問われたとしても回答に戸惑ってしまう可能性が高い。現行のアンケートは主に顕在的ニーズを測定しているが，調査者が本当に知りたい（測定したい）のは潜在的ニーズの方である。」すなわち，生涯学習アンケートが持つ問題点は「顕在的ニーズ」と「潜在的ニーズ」の混乱に起因するというのが筆者の見解である。

では，生涯学習アンケートは有効なのかどうか。また，有効である場合はどのようなケースであり，有効でないとしたら，どのような対応策がありうるのか。まず，顕在的ニーズを把握する目的で実施する限りにおいては，生涯学習アンケートは間違いなく有効なものと判断できる。但し，顕在的ニーズを有する人々（すでに十分に生涯学習に参与している学習者）を対象として実施しなければならないし，そこから得られる情報はアンケートをとるまでもない常識的なものとなる可能性もまた否定できない。

他方，講座企画立案者が知りたがっていると思われる潜在的ニーズの方を適切に把握するためにはどうしたらよいのか。ただ上に掲げた定義からすれば，アンケート形式では潜在的ニーズは容易には得られないということになる（質問される側も簡単には知りえないのであるから）。このような場合，インタビュー形式の情報収集方法はある程度有効となる可能性もある。しかし，労力の割に少数の情報しか得られないこと，熟練したインタビュアーでないと本来知りたい情報にまで到達できない可能性が多々あること，等々の問題もあり，情報収集方法としては生産的とはいいがたい。もっとも効果的な方法は，潜在的ニーズを有すると想定される者（潜在的学習希求者）に，まずは生涯学習の体験をさせて，その学習経験過程から学習への希求をより顕在化させていくようなプログラムを開発していくことではないか。もちろん，生涯学習プログラムへの参加だけで潜在的学習希求者が自発的に自身のニーズを顕在化させていけるかは不明であり，最終的には希求者を援助するような学習ファシリテータやカウンセラーが必要であろうと考えられる。

まとめると，簡便なアンケートだけから（本当に知りたい）潜在的な学習ニーズを把握することはやはり困難であると考えられる。それを引き出すためには，まず学習に参加させ，かつ経験をつんだ先輩学習者が援助しながら，潜在的な学習ニーズ（自分が本当に知りたいこと）を顕在化していく過程が重要なのではないか。このような過程の顕在化を意図した学習プログラム開発にも今後は力を入れていくべきであると考えられる。

引用文献

木暮照正（2005）．平成16年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告　福島大学生涯学習教育研究センター年報，10，5－20.

木暮照正（2004）．平成15年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告　福島大学生涯学習教育研究センター年報，9，5－19.

木暮照正・筒井雄二（2003）．生涯学習ニーズ調査—過去の公開講座受講者と今年度受講者との比較—　福島大学生涯学習教育研究センター年報，8，3－12.

筒井雄二・木暮照正（2002）．福島県における大学を連携させた公開講座の実施について：福島県大学間連携公開講座の報告　福島大学生涯学習教育研究センター年報，7，3－8.

謝　辞

福島大学公開講座及び公開授業で担当講師を務められた方々および関係各位，特にアンケートにご協力いただいた方々に，この場を借りて感謝申し上げます。

平成17年4月25日
公開講座名：＿＿＿＿＿＿＿＿

公開講座アンケート（受講者用）

福島大学生涯学習教育研究センター

福島大学公開講座を受講くださり，誠にありがとうございます．今後，福島大学において企画・実施する公開講座や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするために，みなさまからのご意見をいただきたく，アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます．回答はすべて統計的に処理いたしますので，個人データが取り上げられるような心配はありません．

以下の項目にご回答いただき，次回の講座にこのアンケート用紙をご持参くださいますようお願い申し上げます．その他は担当講師や係員の指示に従ってください．

あなた自身についてお聞きします．

問1-1.　平成17年4月1日時点で**何歳**ですか？

（　　）**歳**

問1-2.　**性別**をお答えください．当てはまる項目の数字に○をつけてください．

1. 男　2. 女

問1-3.　**お住まい**はどちらですか？市町村レベルでお答えください（例：福島市）．

（　　）

問1-4.　**ご職業**は何ですか？当てはまる項目の数字に○をつけてください．「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で（　　）内に具体的にお書きください．

1. 会社員　2. 公務員　3. 自営業　4. 専業主婦

5. パートタイマー　6. 無職　7. その他（　　）

問1-5.　同居している**ご家族**はいますか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください．

1. いない　2. 親　3. 配偶者　4. 子ども　5. その他（　　）

問1-6.　**最後に卒業した学校の種別**をお答えください（例：4年制大学卒）．

（　　）

過去1年間のあなたの生涯学習講座への参加状況についてお聞きします．

問2-1.　過去1年以内に，**いくつの生涯学習講座**（大学・公民館・民間開設の種別を問わず）に参加しましたか？回数を（　　）内にお答えください．なお，一連の公開講座など（例えば，4回の講演会で1シリーズとするなど）は1回と考えてください．

（　　）**回**

【裏面へ続きます】

今回受講された公開講座についてお聞きします.

問 3-1.　今回，この公開講座をどのような**情報源**からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください．「その他」の場合は「6.」に○をつけた上で（　　）内に具体的にお書きください.

1. **新聞の折り込みチラシ**　2. **新聞の記事**　3. **テレビ**
4. **インターネット**　5. **知人・友人の紹介**　6. **その他**（　　）

問 3-2.　今回受講された公開講座の**難易度**はいかがでしたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください.

1. **易しすぎた**　2. **やや易しかった**　3. **ちょうどよかった**
4. **やや難しかった**　5. **難しすぎた**

問 3-3.　今回受講された公開講座に対する**感想**について，下の欄に自由にお答えください.

[　　]

福島大学の公開講座に対するご要望についてお聞きします.

問 4-1.　今後，**福島大学が行う公開講座で**，どのような内容（テーマ）の講座なら受講したいと思いますか？○はいくつつけても構いません.

1. **教養を重視した講座**　（例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座）
2. **資格取得を目指した講座**　（例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座）
3. **実技の習得を目指した講座**　（例：英会話講座やパソコン講座）
4. **趣味を充実させる講座**　（例：スポーツ講座やガーデニング講座）
5. **その他**（　　）

問 4-2. 福島大学の公開講座に対する**ご要望**があれば，下の欄内に自由にお答えください.

[　　]

以上で質問は終わりです.

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください．次回の講座に，このアンケート用紙をご持参いただきますようお願い申し上げます．その他係員の指示に従ってください.

ご協力ありがとうございました.

連絡先　福島大学研究連携課地域連携係
〒960-1296　福島市金谷川 1 番地
TEL：024-548-5212／FAX：024-548-5209

平成17年4月25日

公開授業アンケート（受講生用）

福島大学生涯学習教育研究センター

この度は福島大学公開授業を受講いただき，誠にありがとうございます．
今後，福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするため，みなさまからのご意見をいただきたく，アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます．回答はすべて統計的に処理しますので，個人データが取り上げられるような心配はありません．
以下の項目にご回答いただき，担当講師まで提出してください．よろしくお願い申し上げます．

まず，あなた自身についてお聞きします．

問1-1.　平成17年4月1日時点で**何歳**ですか？

（　　）**歳**

問1-2.　**性別**をお答えください．当てはまる項目の数字に○をつけてください．

1. **男**　2. **女**

問1-3.　**お住まい**はどちらですか？市町村レベルでお答えください（例：福島市）．

（　　）

問1-4.　**ご職業**は何ですか？当てはまる項目の数字に○をつけてください．「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で（　　）内に具体的にお書きください．

1. **会社員**　2. **公務員**　3. **自営業**　4. **専業主婦**
5. **パートタイマー**　6. **無職**　7. **その他**（　　）

問1-5.　同居している**ご家族**はいますか？当てはまるものすべてに○をつけてください．

1. **いない**　2. **親**　3. **配偶者**　4. **子ども**　5. **その他**（　　）

問1-6.　**最後に卒業した学校の種別**をお答えください（例：4年制大学卒）．

（　　）

過去1年間のあなたの生涯学習講座への参加状況についてお聞きします．

問2-1.　過去1年以内に，**いくつの生涯学習講座**（大学，公民館，民間開設の種別を問わず）に参加しましたか？回数を（　　）内にお答えください．なお，一連の公開講座など（例えば，4回の講演会で1シリーズとするなど）は1回と考えてください．

（　　）**回**

【裏面へ続きます】

今回受講された公開授業についてお聞きします.

問 3-1.　今回受講された**公開授業名**をお答えください（複数の公開授業を受けている方は，このアンケートが配布された授業名のみをお答え下さい）.

（　　）

問 3-2.　今回，この公開授業をどのような**情報源**からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください.「その他」の場合は「6.」に○をつけた上で（　　）内に具体的にお書きください.

1. 新聞の折り込みチラシ　2. 新聞の記事　3. テレビ

4. インターネット　5. 知人・友人の紹介　6. その他（　　）

問 3-3.　今回受講された公開授業の**難易度**はいかがでしたか？

1. 易しすぎた　2. やや易しかった　3. ちょうどよかった

4. やや難しかった　5. 難しすぎた

問 3-4.　今回受講された公開授業の**設定回数**（試験期間を除き原則公開）についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください.

[　　]

問 3-5.　今回受講された公開授業に対する**感想**について，下の欄に自由にお答えください.

[　　]

福島大学の公開講座・公開授業に対するご要望についてお聞きします.

問 4-1.　福島大学の公開講座・公開授業に対する**ご要望**があれば，下の欄内に自由にお答えください.

[　　]

以上で質問は終わりです.

記入漏れの項目がないかどうかご確認いただいた上で，担当講師まで提出してください

ご協力ありがとうございました.

連絡先：福島大学生涯学習教育研究センター

平成17年4月25日

公開授業アンケート（担当講師用）

福島大学生涯学習教育研究センター

この度は福島大学公開授業にご参加いただき，誠にありがとうございます．
今後，福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするために，講師のみなさまからのご意見をいただきたく，アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます．

今回の公開授業についてお聞きします．

問 1-1.　市民の受講者が一般学生と一緒に授業を受けるという**公開授業の形態**についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください．

[　　]

問 1-2.　今回の公開授業の**設定回数**（試験期間を除いて原則開放）についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください．

[　　]

問 1-3.　今回の公開授業に関する**全般的な感想やご意見**について，下の欄に自由にお答えください．

[　　]

本学の生涯学習支援活動全般についてお聞きします．

問 2-1.　本学の実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業に対する**ご要望**について，下の欄内に自由にお答えください．

[　　]

以上で質問は終わりです．

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください．
公開授業受講生のアンケート分と併せて回収用封筒に同封し，下記連絡先まで学内便等でお送りくださいますようお願い申し上げます．

ご協力ありがとうございました．

連絡先：　福島大学生涯学習教育研究センター　木暮
内線 3372（024-549-5010）　kogure@educ.fukushima-u.ac.jp
木暮の教員メールボックスは人間発達文化学類教員控室に設置されています．